

JOURNALの発展を願って

図書館情報学科教授 竹村 彰 祐

図書館情報学科創立10周年を迎えて、JOURNAL OF LIBRARY AND INFORMATION SCIENCEの特別記念号が刊行される運びとなったことはまことに喜ばしい限りである。私は着任して7年なので、創立当時のことは知らないが、学部第1期生が4年生であり、翌年には大学院修士課程ができた。当時のことを振り返ると、学部生も院生も何だか頼りない感じであったし、学科自体もよちよち歩きという印象だった。それに比べると、今は確実に質が向上している。しかし、毎日夜遅くまで実験研究に没頭している理系の学生達を長年見てきた私には、院生の日常的な研究活動は、まだ決して十分だとは思えない。文系ではこれが普通のことであろうか？ 教員についても、以前のように教員の間がバラバラということは無くなったが、学問的な論争が日常的に存在する状態にあるわけでもない。

JOURNALについて言うと、ようやく改善の機運が生じ、内容が充実しつつあって嬉しく思っている。それでは今後JOURNALはどのように発展して行くのであろうか。その方向として、少なくとも二つ考えられる。一つは質の高い研究論文のみを掲載するオーソドックスな学術雑誌を目指す方向である。そうした学術雑誌が日本の図書館情報学の分野で必要であるとすれば、投稿者が誰であろうと、内容が良くない原稿は断固としてrejectするだけの権威を備えた査読制度の確立が望まれる。他大学からの投稿を受け付けることも考えるべきであろう。ただ、情報学という幅広い分野に対応して、多彩なレフェリー陣を擁する必要があるだろう。これは将来に取っておくとして、もう一つは学科内の読者を主な対象としながら質の向上を図り、アカデミックな雰囲気醸成に資するという方向がある。教員間、教員と院生、院生間で論談が頻繁に起り、それが論議を呼び、論争に発展するのもよい。そして、それに役立つようなJOURNALに、というのはどうであろうか。現在は予算的に不可能だが、年刊を季刊位にはしたいものである。

私はかつて、自由な雰囲気です勝ちおしゃべりができ、その中で論議が湧然と沸き起こるような談話会を教員（院生も含む）でもつことを提案し、実行されかけた。大学にふさわしいアカデミックな雰囲気が生まれるきっかけになればと思ったからである。これは間もなく、コミュニケーション学科と共催の談話会へと発展して、3回ほど行われた。異分野にまたがる談話会は、私の意図に一層添うものである。ただ、内容はどうしても多少固くなってしまいう傾向はある。この試みも、私学のせいだ教員が多忙過ぎるのも一因であろうが、残念ながら余り頻繁に行えない。

こうした考え方をJOURNALに持ち込めないだろうか？ つまり、JOURNALのページを割いて、談話室、論壇またはLettersのようなスペースを設けるのはどうであろうか。これは上に述べた二つ目の方向に関する一つの具体的方法であろう。JOURNALには純研究論文（もちろん厳正な審査を要する）の他に、総説、短報（Short Communication, 2～4 ページ以内）や、さらに、2 ページ以内の論壇またはLettersの欄があってもよいのではないか？ 情報は広い学問分野にまたがっている。相互理解を進め、深める方策が必要ではなからうか。各欄にどの程度の枚数を割けるか、編集の手間はどうか、経費はどれほど嵩むかなど、いろいろ難しい問題はあろうが、一度検討して頂ければ幸いである。

私はもともと理系の分野で育ち、生物の遺伝子が担う情報がどのように発現して特定のタンパク質ができるか、といった問題を取り扱っていた。この学科に来て初めて情報という語の持つ基本的

性格を考えるようになったが、これは津田良成先生の影響が非常に大きい。私には図書館情報学に関する文献の蓄積が乏しいので、情報を広く論考して論文の形にするには多大の労力を要するし、その時間的余裕もない。しかし、生命科学あるいは広く自然科学的側面から情報の性質を考えることはできる。それをどのような形で皆さんに提供して、考えてもらえるかが私には問題なのである。そういった思いが、このような提言をさせたのかもしれない。

自然現象においては、秩序は崩れて、無秩序な方向に進むが、生物はそれに抗して秩序構造を作り出し維持している。これには分子レベルでいって莫大なエネルギーが必要であるに違いない。従来自然科学では、エネルギーと物質に関する法則によって自然現象を理解してきたが、科学の発達にもかかわらず、生命は依然として理解できなかった。物質とエネルギーだけでは、それぞれの生物が種に特異的な構造を作り上げて機能することはできないのである。この種に固有の形を形成し、機能を発揮させるものは何か？ それは情報でなくて何であろうか。かくして生命科学は一層情報という視点にたつて新たな展開をするであろうし、21世紀を代表するといわれる脳の科学も、心や意識の問題に直面しつつ、情報の受容と発生の機構と結びついて、これからどんどん発展して行くであろう。このような時代を迎えて図書館情報学は果たしてどのような変貌を遂げるのであろうか。